Bull.Br.arachnol.Soc. (1979) **4** (8), 361-365

**ウィリアム・シアー・ブリストウ、1901-1979**

1979年1月11日に死亡したウィリアム・シアー・ブリストウは、英国クモ学の歴史において著名で、多くの点でユニークであった。多くの関心と趣味のためによく知られている人物で、幸運だったことに、彼のクモへの関心は5歳の時に始まり、これは彼の人生を通して持続した。彼の数多くのクモや昆虫に関する論文（主にベッコウバチ科(あるいはクモバチ科とも)のハチ）は半世紀以上におよび、これらの過半数は1941年の前に公刊された。1941年は、彼が40歳に達し、「蜘蛛の礼譲The Comity of Spiders (第二巻)」が書かれた年である。

彼は1901年9月1日にサレーのストーク・ダベニョンで生まれた。彼の子供時代および初期の学校時代は幸せなものだった。彼の父親と両親の親戚は熱心なナチュラリストであり、動物および動物行動に対する彼の関心を育んだ。彼は幼い頃からクモへの興味を発展させ、1914年から1918年の戦争中のウェリントン・カレッジでの彼の在学期間中、彼は最終的に、クモの習性について本を書くことを決めた。1920年に彼はケンブリッジ大学のゴンヴィル・アンド・キーズ・カレッジに上がった。最初は医学を専攻するが、すぐに科学（化学、物理、動物学、植物学）に切り替えた。1921年と1923年の長期休暇中に、彼はヤン・マイエン島〔訳注：グリーンランド東方に位置するノルウェー領の島〕と、中央ブラジルの遠征隊に入隊し、クモに関する2本の初期の論文がこれらから書かれた。大学では、彼の時間の多くは陸上競技に割かれた：彼は大学の陸上競技クラブの会長に選出され、1924年にはチェコスロバキア、ハンガリー、そしてオーストリアのオックスフォードとケンブリッジ共同チームのメンバーであり、アメリカのペンシルベニア州リレーチームのキャプテンだった。この最後のツアーで彼はリウマチ熱で倒れ、1924年のオリンピックチームに残る可能性が終わった。ラグビーフットボールは彼の最後の年に動揺した。彼は道化師、そして時折ケンブリッジのためにプレーし、ある試合で悪い脳震盪と深刻な耳の傷害を負った。その結果、彼の試験の年に、その学期中勉強ができなくなり、アカデミック・キャリアは不可能になるだろうと思う結果となった。1924年にケンブリッジを退学した後、彼はブラナー・モンド社〔訳注：イギリスのソーダ企業〕に入社し、後にI.C.I〔訳注：巨大総合企業のインペリアル・ケミカル・インダストリーズ社〕に入社して残りの人生を過ごし、中央スタッフ部門長として14年後の1962年終わりに退職した。彼の仕事は、子会社を設立するためにマラヤ、タイ、インドネシアへ旅行することを含んでおり、ロンドンの極東部長を務めていた時期に、1875年以来見つけられていなかったハラフシグモの一種*Liphistius desultor*を再発見した。また、クラカトアとバツーの洞窟を訪れ、ウシオグモ属*Desis*の習性を研究した。

その間、彼は、マデイラ、ヤン・マイエン、シリー、ルンディ、スコットランド西部諸島などの島々のクモなどの分布を扱う論文の定常的な流れを作り出していた。別のシリーズでは、「クモの生物学に関する知見」というタイトルが付けられた。これらの論文のいくつかは、現在は古典的であり、すべて、読むのが非常に面白い。求愛と交接の主題への彼のパイオニア的な貢献は、今やよく知られ、普遍的に引用されているが、この時代に書かれたものであり、彼のクモに関する知識は、英国における彼の世代の誰に対しても比類ないものであった。彼はこれが、長年にわたり友人のA. R. ジャクソン博士〔訳注：Arthur Randell Jackson(1877-1944)は、特にコサラグモ科（Erigonidae）やサラグモ科（Linifidae）などの近代動物相で最も偉大な英国の専門家〕から何年にもわたって受けていた助けと励ましはまったく関与していないことを最初に認めていた。ジャクソンのように、熱望しているより若いクモ学者に与えた励ましと実践的援助とともに、彼は自身に対して常に寛大であった。この時期の特に興味深い論文の1つは、主にペトランケビッチの結論の批判として書かれた、彼の「クモの分類」（1938年）であった。彼はおそらく慎重な均衡の取れた議論の方法を他には見せていないだろうし、当時のランドマークのようなものだった。

1939年と1941年に出版された2巻の「蜘蛛の礼譲」は、おそらく彼の作品のピークをマークし、英国のクモ学に最も貢献していると考えられる。この作品では、彼は、クモの生活や習性のあらゆる面について、彼の思考や観察結果をまとめた。餌食の捕獲、食べ物の性質、天敵、求愛と交接は、すべての彼の文章を特徴づけた簡潔な単純さと明快さで、そして彼の素晴らしい最初の経験と知識で記述され、議論された。最初の巻では、「環境による分布」、「クモの分散」、および「クモの個体数」の3つの章が、多くの生態学的問題に対するこの国の最初の重要な貢献を含んでおり、実際、彼は我々にとっての最初のクモ生態学者だと考えられなければならない。加えて、彼は私たちの先人たちによって文献全体に散らばっている知識の多くを恒久的な形でここに集めた。彼の種のリスト、知られている分布、そして受け入れられた名前のシノニムは、それ自体が誰もが感謝する理由となった貢献だった。この作品の出版に関して、彼の大学によってなされた理学博士号授与は、アマチュアによって達成された顕著な殊勲だった。

1940年代初頭に、同定するのにより難しい種、特にサラグモ科Linyphiidaeを同定するのに有能な英国の唯一の生物学者は、青年期がO. P. -ケンブリッジと重複していたアマチュアのW. ファルコナーとJ. E. フル、そしてA. R. ジャクソンだった。ファルコナーは1943年に亡くなり、フルはすでに老いており、1944年初頭にジャクソンが死去したため、英国のクモ学の分類学的な部門は、深刻な打撃を受けた。その時代には、有能な自然主義者が同定するために、すべての英国の種を十分詳細に記述した現代的な教科書が必要であったことは間違いなく明らかだった。戦時中のロンドンにおいて1944年の夏に開催された会議で、ブリストウはこのプロジェクトの即時開始を我々と扇動する際の原動力だった。しかしながら、この仕事は、家庭や職業上の理由から事業から引退することを彼が必要であると見出したときに、「英国のクモ」に残った著者らが深刻に後悔するまで、それほど進展していなかった。

1945年以後、彼が公刊する論文は、科学的に非常に興味深いものであったが、数は減少した。他の論文には伝記と歴史問題に関するものが現れ出したが、これらは彼の広い興味を表しており、読んで非常に面白いものだ。しかし、彼はハラフシグモ科のクモにも取り組み続け、1976年にこれらに関する最後の論文を公刊した。彼はまた、マデイラの近くにあるデゼルタス島〔訳注：北大西洋マカロネシアに位置するポルトガル領の無人島〕でコモリグモ類の*Lycosa ingens*を再発見した。ニュー・ナチュラリスト・シリーズの「クモの世界」は、1958年にアーサーによってイラストが描かれた。この魅力的な本は、多くのコメントを必要とするにはあまりに有名であるが、それは、いくつかのオリジナルな観察とアイディア、そして活発なスタイルで行動を扱うからであり、よくイラストで示され、おそらく他のどの仕事よりも、英国におけるクモ学の、より広いアピールを促進する。1962年に、彼はエディンバラ公から、スタンフォード・ラッフルズ卿を追悼してロンドン動物学会（スタンフォード・ラッフルズ卿はハンフリー・デイビー卿とともに、その創設者の1人である）によって新しく設立されたスタンフォード・ラッフルズ賞を最初に受けた。これらの賞は、動物学への優れた貢献のために、毎年、アマチュア動物学者に与えられる。

定年以後、彼は骨董品、切手、庭造り、ジプシー・キャラバン、考古学(彼の後期の友人、T. C. レスリッジ博士としばしば一緒に)と、シャーロックホームズを忘れずに含む、他の興味や趣味のいくらかに、より多くの時間をつぎこむことができた。すべてのこれらの活動で、彼は自身に特定の優秀さを課し、しばしばオリジナルな貢献をした。彼は、1971年の脳卒中にもかかわらず、ほぼ冬ごとにヨーロッパの各所へ旅立ち続け、タイ(その歴史に関する本のために)、そのうえ、スリランカ、ケニヤ、マレーシア、スマトラ、そしてボルネオも訪問した。そして、その間、彼はハラフシグモ科種の探索と、その研究を再開した。彼がシノニムを整理して*L. sumatranus*を再発見したあとに生み出された*Joumal of Zoology*の論文(1976)は、10種類の既知のハラフシグモ類のリストを与えた。1977年に、彼はエクセターにおける国際クモ学会議でこれらのクモに関する最終的な意見を伝え、その会議の名誉会長に選ばれ、これは彼に大いなる喜びを与えた。

クモ学への彼の多くの注目に値する貢献の相対的な価値について、意見は変化するだろう。よい記憶、無尽蔵な忍耐、そして、用心深いバランスがとれている論理的な心は、彼を彼が行った研究によく適合させた。活動している生きものを観察し、観察したものの重要性を見る珍しい才能を、彼はさらに持っていた。そして、この特別な才能なしでは事実はそれらによってしばしば逃されただろう。ケンブリッジでの日々のさえも、常に一匹狼であり、彼がたいへん称賛し、説明するために多く行っていた、人生そして考えがそびえ立つ人物らの、最後の生き残りであるようだ。戦争以来、長年、彼が他の国でより多く研究者とは接触しなかったことを、何人かは残念に思った。全く何はともあれ、非常にチャーミングな友人とともにあること、そしてその著作を、我々は失うのだ。

G. H. ロケットおよびA. F. ミリッジ（訳：野口大介）